

の木簡が接合したものであり、「寄口」がみえるから、(7)とともに身分表記に相当すると考えられる。(9)は身体の特徴の注記、(12)は集計部分であろう。(13)(14)は戸口の変動に関する注記とみられる。(2)と(3)、(4)と(5)は直接接合しないものの同材を使用している。(8)～(15)は前述の木簡に比べて楷書体ではなく、筆運びが速く字体が崩れたものが多い。(8)(13)(14)にみられるように、界線の間隔に統一性がない。(13)～(15)は直接接合しないが、引つかいたような細い界線や崩し字が類似すること、さらに同材であることから同じ木簡であった可能性がある。

このほかに墨書が判読できないものの、同様の界線を刻んだ横材の木簡が一〇点、界線のみ確認できる木片が四点あり、一括した遺物とみられる。これらは内容や様式からみて、周防国の戸籍か計帳、あるいはそれに類する人身把握のための文書であり、その下書きなしいし作成過程で作られた木簡の断簡と考えられる。

なお、木簡の判読・撮影にあたっては、京都学園大学の八木充氏、奈良文化財研究所の渡辺晃宏氏、馬場基氏、中村一郎氏からご教示、ご協力をいただいた。

(柳 智子)

『草戸木簡集成』一、二の刊行

広島県福山市の芦田川中州に展開した中世集落跡、草戸千軒町遺跡出土木簡を、赤外線テレビカメラ装置による観察を踏まえて紹介する報告書『草戸木簡集成』が刊行されている。『草戸千軒—木簡—』で既報告の分も含め、改めて全貌を紹介するもので、遺構ごとに木簡の出土状況、個別の木簡の釈文と解説・考察を掲載し、さらに木簡データの一覧表と図版を付す。

『草戸木簡集成』一(草戸千軒町遺跡調査研究報告三)

一九九九年三月刊、A4版一二二頁図版一〇頁

『草戸木簡集成』二(草戸千軒町遺跡調査研究報告四)

二〇〇〇年三月刊、A4版九八頁図版二八頁

頒価はいずれも一二〇〇円、送料三八〇円。申し込みは左記へ現金書留で。

〒七二〇—〇〇六七 広島県福山市西町二—四—一

広島県立歴史博物館ミュージアムショップ

TEL 〇八四九—三—二五二三(代)

なお、同博物館で二〇〇〇年春季に行なわれた特別展の図録『中世民衆生活の文字—木簡が語る文化史』(二〇〇〇年四月刊)も、頒価一二〇〇円、送料三八〇円で頒布中。